

「キャッシュレス」って何？ 上手な利用法

今回の質問

キャッシュレス決済サービスを使って
みようと思うのですが、どのようなサ
ービスがあるのでしょうか？

最近、「キャッシュレス社会」という言葉を耳にすることが多くなってきました。実際、新たなキャッシュレス決済サービスが続々と登場しています。「〇〇payを利用すれば、決済額の▲▲%還元」といった大規模なキャンペーンを目にする機会が増え、「自分も利用した方がよいのかも」、「でも、よく分からないし…」などと、気になっている人も多いでしょう。本号では、そんな「キャッシュレス決済」の基本を解説するとともに、安全かつ上手な利用法をご紹介します。監修／山本正行（明治学院大学法学部講師）

※ 本記事は、特定のキャッシュレス決済サービスの利用を推奨するものではありません。また、各サービスの内容については、サービスの提供会社に照会していただくようお願いいたします。

「キャッシュレス決済」とは、クレジットカードをはじめとするカード決済、インターネットショッピングなどでのオンライン決済、スマートフォンで行うモバイル決済など、広い意味で「現金でのやりとりを行わない決済手段」のことを指

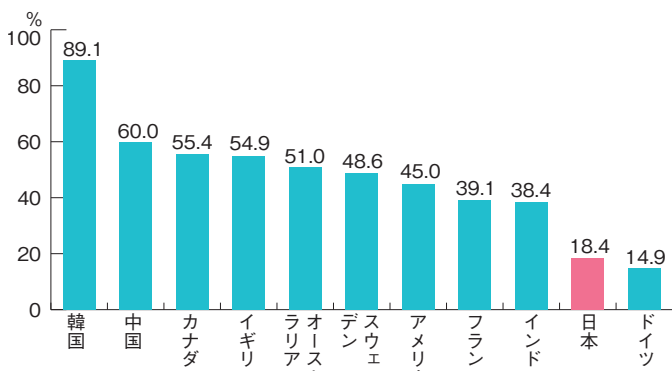
「キャッシュレス決済」とは、クレジットカードをはじめとするカード決済、インターネットショッピングなどでのオンライン決済、スマートフォンで行うモバイル決済など、広い意味で「現金でのやりとりを行わない決済手段」のことを指

しています。

日本でもクレジットカードや交通系電子マネーなど、キャッシュレス決済は相応に浸透しているように見えますが、世界各国のキャッシュレス決済比率を見ると、韓国は89・1%、中国は60・0%となるなか、日本は18・4%にとどまっています【図表1】。

韓国では、クレジットカードについ

【図表1】各国のキャッシュレス決済比率の状況（2015年）



(出所) 経済産業省「キャッシュレス・ビジョン」平成30年4月

いよいよ日本でも
「キャッシュレス社会」到来？

一方で、日本では、治安のよさに加え、偽造通貨がほとんど出回らないともいわれており、現金の信用度が高いことから、利用者側のキャッシュレス決済のニーズは相対的に低いといわれています。加え

て、「キャッシュレス決済」を受け入れる事業者側の負担(専用リーダーの設置)やキャッシュレス決済サービスの提供会社への手数料支払いなどのコスト構造の問題もあり、いまだに支払い手段の主流は現金となっています。

しかし、世界的なキャッシュレス化の流れを踏まえ、政府は「2025年までにキャッシュレス決済比率を40%にする」という目標を掲げています。また、2019年10月の消費増税後には、中小・小規模事業者がキャッシュレスで支払いを行った消費者に9カ月限定で、2~5%のポイント還元を行うことを決めています。

「今の生活に不便を感じていないのに、どうしてキャッシュレス決済が必要なの？」と感じる人もいるでしょう。利用者にとっては、現金を持ち歩くことによる「スリ」、「ひったくり」といったリスクが減り、財布から小銭を取り出す煩雑さや長時間の会計待ちから解放されるのは大きなメリットです。事業者側から見ても、現金の受け渡しやレジ締め作業、現金の管理負担が減少するのは大きなメリットであるほか、利用者の購買情報を用いてマーケティングを高度化することも可能になります。

また、国全体としても、現金の管理は、輸送面など見えないところでコストが相応にかかっているともいわれていますが、それも軽減されます。昨今の訪日

【図表2】 代表的なキャッシュレス決済の種類（5月20日時点で各社より確認できた情報）

決済形態	決済サービスの例		支払い形態（精算方法）		
			前払い (プリペイド)	即時払い (デビット)	後払い (クレジット)
カード決済 (磁気・ICチップ型)	Visa Mastercard JCB		○	○	○
タッチ決済	交通系		○	—	—
	流通系		○	—	—
	ポストペイ		○	○	○
	プラットフォーム系		○	○	○
QR・ バーコード決済	Origami Pay		—	○	○
	d払い		○	—	○
	LINE Pay		○	—	○
	楽天ペイ		—	—	○
	PayPay		○	—	○
	メルペイ		○	—	○

※限度額等の利用条件は、各サービスで異なる。

(出所) 監修者作成

外国人旅行者の増加や、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、キャッシュレス化による利便性の向上が急務となっているようです。

こういったことから日本人の生活にも、いよいよ「キャッシュレス社会」が到来しようとしているのは事実のようです。

決済形態と支払い形態の組み合わせで各サービスの違いを把握

キャッシュレス決済と一言でいっても、実はさまざまな種類があります。ここで、改めてキャッシュレスの決済手段にはどういったものがあるのか、詳しく見てみましょう【図表2】。

キャッシュレスの決済手段は、店舗における決済形態とお金の支払い形態（精算方法）で分類することができます。まず、決済形態としては、①クレジットカードの代名詞となっている「カード決済

（磁気・ICチップ型）、②電子マネーなどの「タッチ決済」、③新しく登場した「QR・バーコード決済」の3種類があります。また、支払い形態として、①現金や金融機関の預貯金口座などから

無人店舗でキャッシュレスを新体験

いずれ財布を持たずに、しかも店員もいない店舗で買い物をする日がやってきます。そんな未来のイメージを実験的に実践している無人コンビニエンスストアで、買い物を体験してみました。

- ① 無人コンビニエンスストアに到着。店内には店員は1人もいない。
- ② ロボットがお出迎え。防犯カメラにより店内はモニターされ、トラブル時などはコールセンターがサポートする体制がとられている。
- ③ レジの枠線の中に購入したい商品を置くと、ディスプレイに支払金額が表示される。
- ④ 決済用のアプリを立ち上げ、QRコードを読み込む。
- ⑤ 支払金額を手入力すると、「支払い完了」が表示され、買い物終了。

商品は勝手に持ち出せないよ！

チャージする「前払い（プリペイド）」
 ②金融機関の預貯金口座からの「即時払い（デビット）」
 ③同「後払い（クレジット）」の3種類があります。

なんらかのキャッシュレス決済サービスを利用したことのある人であればお気づきかもしれませんが、実は、決済形態と支払い形態の組み合わせは一通りではないのです。

「カード決済（磁気・ICチップ型）」という、「後払い」のクレジットカードのイメージがありますが、なかには、「前払い」のプリペイドカードも「即時払い」のデビットカードもあります。「タッチ決済」でも、交通系（Suica、PASMOなど）や流通系（WAON、nanaco、楽天Edyなど）は「前払い」ですが、最近では、「前払い」「即時払い」「後払い」のいずれの支払い形態にも対応するポストペイ（QUICPay、iDなど）やプラットフォーム系（Apple Pay、Google Payなど）も登場しています。これが、「QR・バーコード決済」となると、各サービスによって、「前払い」「即時払い」「後払い」の選択肢が変わってきます。この前提をまず理解することが、自分に合ったキャッシュレス決済選びには欠かせません。

スマートフォン決済普及の立役者は「タッチ決済」

自分はスマートフォンで決済をしてい

るけれど、「QR・バーコード決済」ではないな、と疑問に思われている人もいるかもしれません。実は、日本では、スマートフォンを活用した決済として、先に「NFC」という近距離無線通信技術を活用した「タッチ決済」が普及しました。カードをかざすと「ピコン」などと言音のする「おサイフケータイ」とよばれているものです。交通系や流通系をこうした形態で使われている人もいるでしょう。「タッチ決済」は、ICカードやスマートフォンを店舗に設置されている専用リーダーにかざすだけで、手軽に支払いが完了します。使いやすさが魅力の「タッチ決済」ですが、おサイフケータイに対応していないスマートフォンでは決済できない、専用リーダーを導入した店舗でしか使えないという制約があります。

「QR・バーコード決済」には消費者提示型と店舗提示型がある

その点、「QR・バーコード決済」は、利用者がダウンロードしたアプリに、クレジットカード情報や銀行口座情報を紐づけておくことで決済する仕組みです。スマートフォンアプリを立ち上げるというひと手間は必要ですが、店舗側に専用リーダーは必要ありません。こうした手軽さから、今後は「QR・バーコード決済」の普及が進むのではないかと予測されています。

なお「QR・バーコード決済」には、「消

費者提示型」と「店舗提示型」の2種類の方法があります【図表3】。「消費者提示型」は、利用者がアプリを立ち上げて、生成されたQRコード、バーコードを提示します。店舗側がそれをPOS端末（QRコードリーダー、バーコードリーダー）で読み取り、決済を行う仕組みです。利用者は、QRコードやバーコード画面さえ用意すれば、自ら金額を入力する必要がないので、手軽です。この「消費者提

【図表3】QR・バーコード決済の分類

消費者提示型 (消費者がQRコード・バーコードを提示)	店舗提示型 (店舗がQRコードを提示)
一度限り有効なコードを生成するタイプ。QRコード型とバーコード型が存在。 	店舗のタブレットなどに提示されたQRコードを利用者が読み込むタイプ。 

(出所) 経済産業省「キャッシュレス社会の取組み」を基に監修者作成

示型」は、主にコンビニエンスストアなどのようにPOS端末にQRコードリーダーやバーコードリーダーが備わっている店舗で用いられます。

「店舗提示型」も、利用者がアプリを立ち上げるまでは共通ですが、店舗のタブレットなどにQRコードが提示され、それを利用者がカメラで読み込みます。表示された設定画面で利用者が支払金額を入力し、店員が入力金額に間違いがないか確認した後、利用者が支払いボタンを押すことで、支払いが完了します。この「店舗提示型」はシステム導入費用の負担が軽く、街の小さな飲食店や美容院などでも導入する店舗が増えています。

安全かつ上手に利用するために気にかけておきたいこと

最近では、「QR・バーコード決済」を中心にさまざまな会社がキャッシュレス決済サービスを開始しており、既存の「カード決済（磁気・ICチップ型）」、「タッチ決済」の提供会社も巻き込んだ利用者還元キャンペーンが展開されています。

こうした積極的なキャンペーンの影響で、キャッシュレス決済サービスの利用者が増加している一方、セキュリティのリスクが気になる人も多いようです。

実際、一部のサービスで、悪意ある第三者が不正入手した他人のクレジット

トカード番号などをスマートフォンに登録し、「QR・バーコード決済」を利用して、商品を不正購入するという事件がありました。その後、当該サービスでは、保有者本人のみが知るパスワード入力が必要といった仕組み「3Dセキュア（本人認証サービス）」導入などの対応策が取られました。「QR・バーコード決済」のアプリにクレジットカードを登録する際は、この「3Dセキュア」を利用すると安心度が増します。利用にあたっては、事前登録により、ID・パスワードの発行を受ける必要がありますので、登録方法をカード会社にお問い合わせるとよいでしょう。

それでもやはりデータの流出などが気になる人は、個人情報利用履歴と結びつかない無記名の「タッチ決済」を利用するという選択肢もあります。

ほかにも利用者自身が気を付けなければならぬことはあります。まず、スマートフォンでの生体認証や暗証番号の設定、紛失時には遠隔ロックする機能の設定など、セキュリティ機能を利便してより安全な状態にしておく必要があります。不正利用の被害から身を守るため、クレジットカードの利用履歴のWEBサービスを頻繁にチェックするなどの管理も徹底しましょう。使っていないクレジットカードは処分し、必要最低限の枚数を保有するといったことも自己防衛になります。

「キャッシュレス決済」については、「便利そうだけれど、何にどれだけお金を使ったか、お金の流れが把握しにくいのでは」、「現金と違って支払う感覚が薄いため、金銭感覚が麻痺してしまうのでは」といった不安を持つ人もいます。しかし、「キャッシュレス決済」では、現金とは異なり、「いつ」、「どこで」、「いくら」利用したかという履歴が残るため、収支状況を管理しやすいというメリットもあります。合わせて、オンライン家計簿アプリなどを利用するのも一案です（下記コラム参照）。

それでも、やはり使い過ぎが不安という人は、使用した分が即時に口座から引き落とされる「即時払い」の利用や、「前払い」でも、オートチャージは控え、都度、現金をチャージし、その範囲内で「キャッシュレス決済」を利用するといった工夫も考えられます。

キャッシュレス化の波は確実に広がってきていますが、キャンペーンに踊らされて「よく分からないけれど使ってみよう」と安易に利用することはおすすりません。各キャッシュレス決済サービスの決済形態や支払い形態を理解したうえで、自分に合ったサービスを選択し、収入や預金残高に見合った範囲で、節度ある利用を心がけるようにしましょう。

家計簿アプリで

**現金も電子マネーも
まとめて管理。
使い過ぎ防止にも！**

最近、お金の流れをまとめて可視化してくれる便利なアプリが増えています。あるオンライン家計簿アプリの例をご紹介します（当該アプリの提供会社からは画像掲載の許諾を得ています）。

お金を「見える化」できる

銀行やクレジットカードの口座情報をアプリに登録すると、利用履歴をアプリが自動で取得。口座残高や引落とし金額が、チェックできるようになります。連携しているのは、金融機関、クレジットカード、電子マネー、プリペイド、通販サイト、ねんきんネット、マイレージのポイントなど多岐にわたっています。

現金の利用履歴は手入力やレシート撮影で、品目や金額、日時などのデータを読み取ることができます。複数口座の利用履歴が一覧表示で確認できるため、いつ、何にいくら使ったかが一目瞭然です。



さらに口座名をタッチすると、月ごとの収支履歴が表示され、過去の1年間の数字の推移をグラフで比較することもできます。



通知機能で使い過ぎを防ぐ

家計簿画面では、「食費」、「日用品」、「光熱費」など費目ごとにデータが自動的に分類され、1カ月の支出に占める割合をグラフで表示。分かりやすいビジュアルで、使い過ぎや節約ポイントの判断に役立ちます。

また、利用金額が大きい、高額の支払いが発生したときには、メールやアプリ上で通知が来るので、使い過ぎ防止にももちろん、不正利用の早期発見にも効果的です。このアプリの場合、基本機能は無料ですが、有料プランにアップグレードすることで、「家計診断」や家計の節約ポイントを解説する「家計資金レポート」などのサービスも利用できます。



キャッシュレスの家計管理が心配な人は、こういったアプリを試してみるのも一案です。その際、個人情報がどのように使われているのかを確認し、納得してからサービスを利用することが大切です。なお、本コラムについても特定のアプリの利用を推奨するものではありません。